

「人に『すみつく』かほのけしきは」

——平中の妻と『はいずみ』の女——

米 田 新 子

—

平中墨塗り譚は、現在、『古本説話集』⁽²⁾や『源氏物語』末摘花巻の光源氏の言葉に注を付した『源氏物語』古注釈により知られる。

『源氏物語』の古注では、平安末期成立の『源氏物語釈』⁽³⁾にすでにみえることから、平安末期以前には流布していた話であると考えられる。平中墨塗り譚は、載せられている文献によってその姿が多少異なるものの、概ね——平中が女の前で愛情のあるところをみせようと硯瓶の中に水を入れて持ち歩き「そら泣き」をしていた、そのことを知った平中の妻が硯瓶の水を墨と入れ替えたために、知らずに「そら泣き」をした平中の顔が真っ黒になった——という話である。

『源氏物語』の古注釈に梗概の記された平中墨塗り譚は著名であるが、この話の末尾にみえる平中の妻の歌はあまり注目されていない。

い。

むらさきのうへにはなへにつけてみせ給所。御すゝりかめの水にかみをぬらしてのこひ給へは、平中かやうにいるとりかえ給などあるは、

平中みる女ことになくけしきを見せんとて、すゝりかめにみつをいれてくして、めをぬらしけるを、女こゝろえて、そのかめにすみをすりていれたりけるを、しらて、れいのやうにしてかへりけるみて、女

われにこそつらさを君かみすれとも人にすみつくかほのけしきは⁽⁴⁾
(前田家本『源氏物語釈』⁽⁵⁾)

この「われにこそ」の歌は、「私には薄情な態度しかあなたは見せてくれないけれど、他の女に住みついて彼女には愛情があることを示す涙を見せているのね、あなたの顔に墨がついているのを見ればわかるのよ」⁽⁶⁾といった意である。ここに、「二人妻」の設定がある

こと、そして、第四句の「すみつく」に「住みつく」・「墨つく」が掛けられていること、以上の二点にまず注目したい。

二

この「住み」・「墨」の掛詞が、『はいずみ』前半・後半の「住み」と「墨」の対照に活用されたのではなからうかというのが、本論の目標とする論旨である。平中墨塗り譚と『はいずみ』の関わりについては以前から御指摘があり、顔に墨を塗るといふ趣向の共通性から『はいずみ』後半部とのつながりが論じられてきた。私は、この平中墨塗り譚が、先に述べたような掛詞を利用した方法によって、後半だけでなく前半にも大きく関わり、前半と後半を結ぶ、言わば蝶番の役割を果たしているのではないかと考えている。本稿では、このように平中の妻の詠歌の意味を重視することにより、「二人妻」説話の新しい展開を考えてみたいと思う。

堤中納言物語中の一作品『はいずみ』は、「二人妻」説話の系譜にある物語であり、もとの女への男の回帰が描かれた前半と、新しい女への男の愛想づかしが描かれた後半とから成っている。『はいずみ』作者の構想の内実を探るにあたり、これから『はいずみ』において注目する事柄が、「二人妻」説話の中ではどのような様相を呈しているのかという点について、まず確認しておきたい。なお、「二人妻」説話と『はいずみ』の諸要素の比較に関しては、すでに神尾陽子氏・竹村信治氏に御論がある。が、本稿はそれらの先行研究とはやや視点を異にすると思われるので、私に注目する観点を表にして示した。

① 『伊勢物語』 二二三段		② 『大和物語』 一四九段		『今昔物語集』 卷三〇ノ一〇	
危機的状況	男に新しい通い 所ができる	男に新しい通い 所ができる	男、新しい女の 切を持って去る	男、新しい女の 切を持って去る	男、新しい女の 切を持って去る
危機脱出の きっかけ	垣間見	垣間見	童の活躍	童の活躍	童の活躍
もとの女の歌	風ふけばおきつ白波たつた山よはに や君がひとりこゆらむ	風吹けば沖つしら波たつた山夜半に や君がひとりこゆらむ	ふねもいぬまかぢも見え今日より はうき世の中をいかでわたらむ	ふねもいぬまかぢも見え今日より はうき世の中をいかでわたらむ	フネモコジマカヂモコジナケフヨリ ハウキ世ノナカライカデワタラム
新しい女を厭うようになる理由	いまはうちとけて、手づから飯匙とりて、筒子のう つはものにもりけるを見て、いかずなりにけり。 (君があたりー) (君来むとー)	いとあやしきさまなる衣を着て、大櫛を面櫛にさし かけてをり、手づから飯もりをりける。いといみじ と思ひて、来にけるままに、いかずなりにけり。			

③	『大和物語』 一五八段	もとの女、新しい女と同居する	壁を隔てて、男聞く	われもしかなくてぞ人に恋ひられし今こそよそに声をのみ聞け
④	『今昔物語集』 卷三〇ノ一二	もとの女、新しい女と家を並べて住む	男、直接聞く	今ノ妻ノ云ツル事(願物ニテモ甘シ、焼物ニテモ美キ奴ゾカシ)思ヒ被合テ、今ノ妻ノ志失ニケレバ、京ニ送テケリ。
④	『今昔物語集』 卷三〇ノ一二	男、新しい女の所に去る	童の活躍	アマノツトラモハヌカタニアリケレバミルカイナクモカヘシツルカナ
④	『古今和歌集』九四四番左注・『十訓抄』第八にみえる。	『十訓抄』第八・『沙石集』卷第七にみえる。	『十訓抄』第八にみえる。	今ノ妻ノ、貝ハ焼テ食テマシ、海松ハ酢ニ入レテ食テマシト云シ事思ヒ被合テ、忽ニ心替テ、一本ノ所ニ行ナムト思フ心付ニケレバ、ヤガテ其ノ蛤ヲ打具シテ行ニケリ。

①他に、『古今和歌集』九四四番左注・『十訓抄』第八にみえる。
②他に、『十訓抄』第八・『沙石集』卷第七にみえる。
なお、①から④の引用は、すべて、小学館日本古典文学全集に拠った。

「二人妻」説話の系譜につらなる話としては、表に記した作品群が指摘できる。同話関係にあるものは、同じ数字の見出しのもとに分類した。これら、『はいずみ』も含めた「二人妻」説話の範囲にある話は、大筋としては、——長年仲睦まじかった夫婦が新しい女の出現によって危機に陥るものの、もとの女の詠んだ歌に男が心動かされ夫婦がもとの鞘に収まる——という点で勿論一致するが、それぞれの作品に固有の要素も有している。そうした相違点のどこに着目するのかを、その理由とともに以下述べる。

「二人妻」説話の枠組を持つ話の場合、もとの女は新しい女への男の懸想を知った後も、その苦衷を表に出そうとはしない。もとの女の普段は隠された心情が、どんなかたちで男に明らかにされるのか、
「二人妻」説話の一つの大きなポイントのように思われる。

そして、このような趣向の核に位置づけられるのが、もとの女の詠

歌であると言えよう。こうした、もとの女への男の回帰と、これを背後から援護する新しい女への男の愛想づかし、それぞれの事情をいかに独自に工夫するかが作者の腕のみせどころの一つであったのではないかと考えられる。したがって、これらの趣向についてもとの女の詠歌を核としつつ検討したい。そのため、注目する項目として、趣向の出発点である危機的状況がどのようにつくられているのか、危機脱出のきっかけ——これは、具体的には、男がもとの女の歌をどのようにして知ることである——となったのは何なのか、物語の設定をふまえてもとの女の歌がどのように仕立てられているのか、そして、新しい女を男が厭うようになる理由としてどんな設定がされているのか、といった点をとりあげた。

①の「沖つ白波」の話の場合、新しい女への男の通いが危機的状況として設定されている。その危機を救うきっかけが、男によるも

との女の垣間見である。もとの女はその時、「風吹けば沖つ白波たつた山夜半にや君がひとりこゆらむ」という、男の「高安」通いを氣遣う歌を詠み、男の翻意が実現する。『伊勢物語』にはみられないものの、『古今和歌集』では「月のおもしろかりける夜」、『大和物語』においては「月のいとみじうおもしろき」とあるように、美しい「月」のもとの垣間見が設定されている。これは他の「二人妻」説話にはみられず、『古今和歌集』『大和物語』に記された「沖つ白波」の話に特有の要素であると言えるだろう。『大和物語』におけるもとの女の描写は、雅な詠歌の場面の後に、「この女、うち泣きてふして、かなまりに水を入れて、胸になむすゑたりける。あやし、いかにするにかあらむとて、なほ見る。さればこの水、熱湯にたぎりぬれば、湯ふてつ。また水を入れる」という胸のうちの情念の炎をほとばしらせた、ややもするとグロテスクともなりかねない情景をつなげており、これもまた、「二人妻」説話の中では異色である。以上の二点から、『大和物語』は、『はいずみ』に直接結果していく萌芽を内包しているのではなからうかと考えているのであるが、この点については、のちに展開する『はいずみ』の趣向の検討もふまえた上で、もう一度触れたい。男が新しい女を厭うようになる理由は、『伊勢物語』と『大和物語』とでは若干異なるものの、「手づから飯匙とりて」や「大櫛を面櫛にさしかけてをり」等から、新しい女の粗野な属性のためと考えるとよいだろう。

②の場合、男が家財道具一切とともに新しい女のもとへ去ってしまうという危機的状況が設定されている。ただ一つもとの女の手元に残ったのは「馬ぶね」のみで、それさえも男の従者である「まかぢ」という童が取りにやって来る。この童に託したもとの女の歌、「ふねもいぬまかぢも見えじ今日よりはうき世の中をいかでわたらむ」が男の心を動かした。

③では、男が新しい女を家に連れて来て、もとの女は新しい女と「壁をへだてて」住む、あるいは「家を並べて」住むという危機的状況がつけられている。「鹿」の鳴き声に対して、もとの女が「われもしかなきてぞ人に恋ひられし今こそよそに声をのみ聞け」という歌を詠んだことにより、男は彼女の風雅な心に感じ入り愛情が甦る。『今昔物語集』の方では、新しい女の風流よりも食い気に走る発言が、新しい女を男が厭うようになった理由として記されている。

④の話の場合、危機的状況として、男が新しい女のもとへ去ってしまうということが設定されている。誤ってもとの女のところへ届けられた「蛤」「海松」を、取り返しにやって来た童に託したもとの女の歌、「アマノツトラモハヌカタニアリケレバミルカイナクモカヘシツルカナ」が男の心を打った。このもとの女の風流の心に対して、新しい女の食い気が③と同様に設定され、男が新しい女を厭う理由となっている。

以上、歌を中心に、もとの女への男の回帰・新しい女への男の愛想づかしの事情を記すに際しての、それぞれの話の趣向を一覧した。もとの女の詠歌に関してまとめれば、①の「沖つ白波」の話を除く②③④の話の場合、「ふね」「まかち」等の具象的素材を詠み込んでいるということが、注目される。これらは、言わば現実密着型の詠歌であり、非和歌的である。これらに対して「沖つ白波」の方は、和歌としての叙情を十分に湛えており、そうした意味で他の②③④の話とは異質である。この点に着目すると、『はいずみ』に立ち現れた世界は、「二人妻」説話の中では「沖つ白波」の話に近接していると感じられる。詳しいことは、以下の検討に譲りたい。

三

次に、『はいずみ』において、どのような趣向が凝らされ、それがいかに詠歌に結実しているのかを、みてみたい。

『はいずみ』で設定されたもとの女の危機は、彼女が長年住み慣れた家を出て行かなくてはならなくなる、という状況である。

〔中略〕世の人々は『妻すゑたまへる人を。思ふと、さ言ふとも、家にすゑたる人こそ、やごとなく思ふにあらめ』など言ふも安からず。げに、さることに侍る。〔はいずみ〕

として、新しい女の親は娘と男との同居を迫った。こうした圧力によって自身の愛情の深さが試されている男は、なかば強がりから新

しい女を自分の家へ迎えることを宣言する。そして、男はためらいつつも、新しい女が家にやって来ることをもとの女にうちあけることになった。

〔中略〕かしこに『土犯すべきを、ここに渡せ』となむ言ふを。いかが思す。ほかへや往なむと思す。何かは苦しからむ、かくながら、端つかたにおはせよかし。忍びて、たちまちに、いづちかはおはせむ。〔はいずみ〕

男は、「向こうでは、土忌みをしなくてはならないので、ここへ移せ、と言うんですが——」として、新しい女が移って来ることがほんの一次的なことだと嘘をつく。しかし、もとの女は、

「ここに迎へむとて言ふなめり。(略)」〔はいずみ〕
と男の言葉の裏を察して、自分から家を出て行く決心をすることになる。

このような切迫した危機的状況を救う、もとの女への男の回帰の過程に、『はいずみ』では四首の和歌が配されている。

①男(中略)、今、ここへ忍びて来ぬ。女、待つとて端に居たり。月の明きに、泣くこと限りなし。

わが身かくかけ離れむと思ひきや月だに宿をすみはつる世に

と言ひて、泣くほどに、来れば、さりげなくて、うちそばむきて居たり。

②『いびくにかとまらせたまひぬ』など、仰せ候はば、いかが

申さむする」と言へば、泣く泣く、「かやうに申せ」とて、

いづこにか送りはせしと人間はば心はゆかぬ涙川まで

と言ふを聞きて、童も泣く泣く馬にうち乗りて、ほどもなく来

つきぬ。(中略) ありつる歌を語るに、男もいと悲しくて、う

ち泣かれぬ。

③男、うちおどろきて見れば、月もやうやう山の端近くなりにた

り。「あやしく遅く帰るものかな。遠きところへ行きけるにこ

そ」と思ふも、いとあはれなれば、

すみなれし宿を見捨てて行く月の影におほせて恋ふるわざ

かな

と言ふにぞ、童帰りたる。

④男「明けぬさきに」とて、この童、供にて、いとく行きつき

ぬ。げに、いと小さくあはれたる家なり。見るより悲しくて、

打ち叩けば、この女は来つきにしより、さらに泣き臥したるほ

どにて、「誰そ」と問はずれば、この男の声にて、

涙川そことも知らずつらき瀬を行きかへりつつながれ来に

けり

と言ふを、女、「いと思はずに似たる声かな」とまで、あさま

しうおぼゆ。

⑤『はいずみ』。なお、和歌を含む本文の引用は物語の叙述の順

に掲げた)

①の引用。もとの女の行く先は大原と決まった。新しい女を明日渡そうという日、もとの女がとうとう住み慣れた我が家を出発しようとしていた時に、男は女を見送ろうと家に来て来た。「男(中略)、今、ここへ忍びて来ぬ。女、待つとて端に居たり。月の明きに、泣くこと限りなし」。この筆の運びは、普段はおくびにも出さなかつた苦しい胸のうちを吐露した女の詠歌と彼女の哀しみの涙を、男がついに垣間見するのではないかという期待を、享受者に生じさせる。しかも、月光のもとでの垣間見は、前述したように「沖つ白波」の話(『古今和歌集』・『大和物語』)にもあり、いやがうえにもその期待は高まるだろう。この箇所は、物語において一つのクライマックスとなっているのである。しかし、その垣間見は、「と言ひて、泣くほどに、来れば、さりげなくて、うちそばむきて居たり」ということで、実際には実現しない。歌の検討に入ろう。「私の身がこのように懸け離れてしまうことになろうと以前は思っただろうか、月さえもこの住み慣れた宿を住処として澄みわたる世に」。傍線部「すみ」には、「住み」と「澄み」が掛けられている。もとの女の危機は、長年住み慣れた我が家を離れて行かなくてはならなくなるということであつたので、この「住み」は、もとの女の物語のなかで主題的な位相を占める語であると言へる。もちろん、他の「二人妻」説話中の詠歌においては、みられない表現である。したがっ

て、ここに『はいずみ』独自の趣向を認めることができるだろう。

このもとの女の歌を耳にすることがなかったにもかかわらず、男は女が出て行った後、ひとり物思いに耽って③の歌を詠む。「この住み慣れた宿を見捨てて山の端に移ってゆく、澄んだあの月影を恋う心にかこつけて、この宿を去って行ったあの人を恋しく思うことだなあ」。この男の詠は、①で掲げたもとの女の詠に呼応するような歌のつくりになっている。「月」が、「住み」・「澄み」という掛詞を導いていて、別々に詠まれた独詠歌を結びつけている。離れていても寄り添いあう二人の心を、印象的に描出している箇所であると言える。いったんは別離の道を選ぶものの、このように二人の心は実際の二人を隔てる距離を越えて呼びあう。

そして、この、もとの女への思慕の情をつのらせる男の心を激しく揺さぶり、本格的な翻意へと導くはたらきをするのが、②に掲げたもとの女の歌である。もとの女は、自身を大原まで送ってくれた童に歌を託す。「二人妻」説話の伝統の中で、童の存在を確認してみよう。「沖つ白波」の話の場合、『伊勢物語』・『古今和歌集』の左注にはみられないが、『大和物語』には「使ふ人の前なりけるにいひける」として童に類する人物の存在が認められる。『はいずみ』のように、もとの女の歌を男に伝える役目を担う童としては、『馬槽』の話の童や『海草』の話の童が想起される。『はいずみ』は、こうした「二人妻」説話の伝統をうまく活用していると言える

だろう。歌をみてみる。「どこまで送ったのかとあの人が尋ねたら、こう伝えて下さい、心の晴れる間とてない涙川まで行きました、この身は行きましたが、心はあなたのもとを離れないでしよう」。男はこの歌によつてはじめて、もとの女が哀しみの涙を流していたこと、そして、女が自分を深く愛していたことを知り、激しく心動かされる。すぐさま、もとの女を連れ戻しに行くことを決心し、童に案内されて大原の女のもとへ到着した。

この、もとの女の「いづこにか」の歌をうけて女へ呼びかけたのが、④の男の歌である。「あなたの行く先がまさかそんなところとも知らず、あなたが私に本当のことを薄情にも言ってくれなかったのを怨みながら、行きつ戻りつして泣きながらやって来ました」。もとの女の哀しみの涙は男の心を揺さぶり、男にも涙を催させた。両者のあふれる涙に、二人の甦った愛情が象徴されていると言えよう。この「涙」も、「住み」同様、他の「二人妻」説話の中では詠歌の素材として用いられていない。⁽¹³⁾

以上、もとの女への男の回帰を記す際の『はいずみ』の趣向を、核となる歌を中心に辿った。「二人妻」説話の伝統の中ではもとの女の独詠歌のみが記されていたのであるが、『はいずみ』においては贈答歌的な結びつきをみせる四首の和歌が配されているのが特徴的である。もとの女の歌二首は愛する夫と離れて長年住み慣れた家を去らねばならぬ女の哀しみを、そして男の歌二首はもとの女への

断ち切れぬ男の慕情をしつとりと刻んでおり、叙情的・和歌的であると言つてよく、その点で『はいずみ』は「沖つ白波」の話の系譜に位置するととらえることができるだろう。

四

次に、新しい女への男の愛想づかしを記す際の『はいずみ』の趣向をみてみる。

「いづら、いづこにぞ」と言ひて、櫛の箱を取り寄せて、白き物をつくると思ひたれば、取りたがへて、はい墨入りたる畳紙を取り出でて、鏡も持たず、うちさうぞきて、女は、『そこに、しばし。な入りたまひそ』と言へ」とて、是非も知らず。きしつくるほどに、男、「いとくも疎みたまふかな」とて、簾をかきあげて入りぬれば、畳紙を隠して、おろおろにならしめて、うち口おほひて、優まくれに、したてたりと思ひて、まだらに指形につけて、目のきろきろとして、またたき居たり。

『はいずみ』

突然の男の来訪に、新しい女は慌てふためき、身づくろいに無我夢中となった。その際、おしろいと間違えて「はい墨」を顔に塗りつけてしまい、新しい女の顔は黒くまだらになる。それを見た男は、見るに、あさましう、めづらかに思ひて、いかにせむと恐ろしければ、近くも寄りて、「よし、今しばしありて参らむ」とて、

しばし見るも、むくつけければ、往ぬ。『はいずみ』

とあるように、嫌悪というよりもむしろ恐怖を感じて帰つて行つた。こうした平中墨塗リ譚を用いた幕切れは、新しい女への男の愛想づかしを描く先にみた「二人妻」説話の中でも、その極端さにおいて他に類をみない。

ところで、顔に墨を塗つた新しい女に驚き恐怖したのは男だけにとどまらず、男の早々の辞去の後、不満げに女の部屋にやつて来た彼女の両親も巻き込んで、家中大変な騒ぎとなった。のちには陰陽師に祈禱をたのむほどの大騒ぎの中、新しい女が「いかになりたるぞや、いかになりたるぞや」と泣きじゃくっていると、その涙のこぼれた後から普通の膚が顔を出した。そして、物語は

かかりけるものを、「いたづらになりたまへる」とて、騒ぎけるこそ、かへすがへすをかしけれ。『はいずみ』
という作者の言葉とともに幕を閉じる。

ここで、新しい女の造型について触れておこう。新しい女は、その心情について深く掘り下げられない。全篇を通して、男へのはたらきかけは彼女の両親が常に前面に出ておこなっている。例えば、男がもとの女のところにはかりいるようになってからも、彼女の哀しみは一切記されず、物語は以下のように述べる。

ただここにのみありければ、父母思ひなげく。『はいずみ』
新しい女は、言わば、面影の見えない女として造型されていると言

えよう。それは、享受者の感情移入を拒み、そして同情を退けていくかのようである。新しい女は、あくまで滑稽な存在として物語の中に位置しているのである。

このように、享受者と隔たった距離にある新しい女は、ややもするとグロテスクともとられかねない騒動を巻き起こすという点で、前述したように『大和物語』の女にその淵源が求められる。『大和物語』のもとの女の場合は、嫉妬の炎を燃やす姿に男が同情し夫婦の縁が再び強く結び合わされる。が、彼女の行動そのものに焦点をあててみると、非日常的な極端さという点では『はいずみ』の新しい女の行動と類似していると言える。「二人妻」説話の展開を考えてみると、『はいずみ』は、こうしたいくらいに怪奇的な要素を『大和物語』から受け継ぎ平中墨塗り譚を用いてデフォルメしていると言えるのだが、嫉妬という問題に関しては、隠微な表現をとっており複雑な様相を呈している。黒くなった新しい女の顔を見て、彼女の家の人々は

「これをば思ひ疎みたまひぬべきことをのみ、かしこにはしはべるなるに、おはしたれば、御顔のかくなりたる」

『はいずみ』

として、もとの女による嫉妬にその原因を求めている。そして、例の陰陽師を呼ぶ騒ぎとなるのである。勿論、実際には、もとの女の嫉妬のために新しい女が「いたづら」になったのではないのであ

て、その勘違い振りが皮肉な笑いを誘う。『はいずみ』においては、嫉妬心の戯画化がおこなわれたと言えるだろう。当然のことながら、これらの趣向の核に位置するのが、「はい」墨である。

五

こうした『はいずみ』の趣向は、物語の前半部分と後半部分における、哀愁漂うもとの女と滑稽味溢れる新しい女との対照的な造型を実現させているだけでなく、以下述べるレベルにおける対照をも意図しているのではないかと考えている。¹³⁾

まず第一に、「すみ」という語の対応が指摘できる。前半部分では、「すみ」は「住み」・「澄み」の両義に用いられ、特に「住み」の方は、もとの女が長年住み慣れた家を去らねばならないという問題を物語の中で展開するにあたり、重要な核となる言葉であった。これに対して、後半部分の「すみ」は新しい女が間違つて顔に塗つてしまう「はい」墨である。同じ音を持つ言葉を前半後半の重要なポイントに用い、その両義性を利用して、前半部分と後半部分の言葉の意味の対応を楽しませるといふ対照が仕組まれていると言えるだろう。

もう一つ、「涙」も両者の対照を支えているものである。前半の「涙」はもとの女の哀しみを背負つた「涙」であり、やがては彼女を幸福へと導く「涙」であった。後半の「涙」は自らの異様な姿を

鏡で見た新しい女の驚きの「涙」であり、彼女の顔をもとに戻す役割を担っている。前者は深刻な人間ドラマを背負った「涙」、後者はどこか滑稽さを醸し出す「涙」ということで、そのはたらしの面
で対照的であると言つてよいだろう。

このように、両者の対照はより技巧的に仕組まれていると言へる。そして、はじめに述べたごとく、この前半と後半の対照を支えているのが平中墨塗り譚であろうと考えている。平中の妻の詠歌を、もう一度引用しよう。

われにこそつらさを君かみすれとも人にすみつくかほのけしき
は
〔前田家本『源氏物語釈』〕

第四句「すみつく」には、「住みつく」「墨つく」が掛けられている。この「住み・墨」の掛詞が、『はいずみ』前半・後半の「住み」と「墨」の対照に活用されているのである。

また、平中の「そら泣き」の涙は、『はいずみ』において、前半のものとの女の深刻な「涙」と後半の新しい女の滑稽な「涙」に姿を変えたともみることができよう。平中墨塗り譚を核として、もとの女と新しい女の物語を対照的に記したところに、『はいずみ』作者の工夫がみとれるように思われる。そう考えると、従来は、物語の後半部分のみをうけた命名名であると捉えられていた『はいずみ』という題名も、これまでとは違った様相を呈してくるよう⁽¹⁴⁾に思う。

つまり、『はいずみ』の「すみ」には、前半の「すみ」も響かせて

あるのではないかと考えられるのである。

最後に、「二人妻」説話の流れの中でみる『はいずみ』の達成について言及し結びとしたい。

『はいずみ』は、「月」という素材の採用・雅で叙情的な四首の和歌の存在・使用人の介在・非日常的怪奇的な趣向の採用といった点で、「二人妻」説話の中でも「沖つ白波」の話の『大和物語』の系譜を受け継ぎ、独自の趣向を凝らした物語であると言えよう。そして、この創造の営みには、平中墨塗り譚が大きく関与している。そのため、『はいずみ』は「二人妻」説話の流れにおいて、新しい展開を示すこととなった。

一つには、新しい女への男の愛想づかしを他の「二人妻」説話にくらべて、よりはっきりとしたかたちで行ったことがあげられる。顔の黒くなった新しい女に対して、男は恐怖してそそくさと帰ってしまったという明確な幕切れになっており、そこには滑稽という要素もみとれる。この滑稽さを強調したことは、新しい女が男に捨てられるという悲劇を別の角度から切り取り、悲劇を喜劇によって薄め、一篇を締めくくったとも言えるだろう⁽¹⁵⁾。

またもう一つ、前半と後半の結びつきの実現がなされたことがあげられる。従来「二人妻」説話では、後半(後半と言ってしまうにはあまりに比重が軽いのだが)の新しい女に関する記述は後日談といった趣が強く、やや付けたし的で、その前に繰り広げられたも

との女の物語とはどこかそぐわないような印象があった。そういうたもとの女と新しい女の話、つまり前半後半の有機的な結びつきの実現を先に指摘したような対照によって試みたのが、『はいずみ』という物語ではなかったかと考えている。

ではなぜ、こうしたかたちをとって両者の結びつきが実現されたのだろうか。この問題は、『はいずみ』の主題にも大きく関わってくるように思われる。もう一度、新しい女の喜劇に眼を向けてみよう。彼女が男から厭われる原因となる墨塗りの失敗は、他の「二人妻」説話における新しい女たちの失敗と、その質において微妙に異なっている。すでにみたように、他の「二人妻」説話では、新しい女の劣った性質にその失敗の要因が積極的に求められている。「沖つ白波」の話の場合、それは彼女の粗野な属性であり、「鹿」の話・「海草」の話の場合、それは彼女の風流心の無さであった。つまり、新しい女の根本的な性質の問題に帰するのである。これに対して『はいずみ』における新しい女の失敗というのは、どちらかと言うと、偶発的突発的なものである。彼女が昼間くつろいでいた時、男が突然に来訪した。慌てて男のために身づくろいをしようとした女の失敗なのである。⁽¹⁶⁾それを、彼女の心理に深く入りこまず、現象を周囲の人々の驚き慌てふためく様子を中心に喜劇として記している。したがって、もっと新しい女に寄り添う視点をとるなら、これは悲劇にもなりかねないと言えるだろう。『はいずみ』におい

ては、つまるところ、悲劇も喜劇も描く対象との距離によって決められているのである。ということば、悲劇的な描かれ方をしているもとの女と、喜劇的な描かれ方をしている新しい女と、両者の立場はあくまで流動的なものであると捉えることができるのではなからうか。そして、そういう二つの立場の可逆性を表現の上で保障しているのが、蝶番としての機能を有する「ずみ(住み・墨)」であると思われる。

『はいずみ』は、「二人妻」説話の話型にのっとりつつも、もとの女の哀愁と新しい女の滑稽とをより強調して、両者の対照を際やかに記した。のみならず、この両極端な二人を結ぶ表現構造をとっており、全く接点がないはずの女たちにつながりを与えた。それは、女の普遍的な運命を凝視しようとした作者の営みであったと言えるのではなからうか。

(一九九三年九月草了)

〔注〕

(1) 『古本説話集』に載る平中墨塗り譚は、前半に『大和物語』六四段とほとんど同文の話が記されている。これらと『はいずみ』との関係も考えねばならない一つの視点であると思うが、それぞれの作品の成立とも関わり、相互の影響関係は微妙な問題となってくるので、今回は触れ得なかった。

(2) 他に、『源氏物語奥入』(平中の妻の歌のみ)・『異本紫明抄』

『河海抄』等にも見える。

(3) 『源氏物語』古注釈に引かれた平中墨塗り譚は、墨を入れた

人物と歌を詠んだ人物について、組み合わせとして四通りの

解釈(女―女、女―妻、妻―女、妻―妻)が可能である。本

来なら、この点について一つ一つ検討を加えるべきなのだ

が、今回問題にする詠歌中の「すみつく」には直接関わって

こないもので、統稿に譲ることとした。ここに記した梗概は、

『古本説話集』との関係も考えた上で、もっとも自然ではな

かろうかと判断したものである。なお、『平中全講』(一九五

九年、赤堤居私家版)において、萩谷朴氏は、「それ等註釈

書(米田注、『源氏物語』古注釈諸書)に引かれた平中墨塗

り譚においては、硯瓶の中に墨をすり入れたのは、平中の本

妻ではなく、通う先の女となっている」と述べておられる。

さきに記したように、私は他の解釈も一応可能であろうと考

えている。

(4) 書陵部本『源氏物語釈』では、第五句が「かほのけしきよ」

となっている。こちらの方が一首の意味としては通りやすい

だろう。後で試みた解釈も、この本文に従った。

(5) 源氏物語大成。なお、表記は一部改めた。

(6) 先に注3で述べたように、墨を入れた人物―妻・歌を詠んだ

人物―妻として、解釈した。

(7) 神尾暢子氏「掃墨物語の源流素材——堤中納言と伝承説話

——」(『大阪教育大学紀要』第一部門第二七卷第一・二号、

一九七八年二月)

(8) 竹村信治氏『はいずみ』考——『堤中納言物語』私注(一)

——(『古典研究』第一、一九九二年二月)

(9) 新編国歌大観に拠る。

(10) 小学館日本古典文学全集。以下、『はいずみ』の引用は同書

に拠る。なお、表記は一部改めた。

(11) もちろん、地の文には、

むかし、大和の国、葛城の郡にすむ男女ありけり。この

女、顔かたちいと清らなり。年ごろ思ひかはしてすむに

〔『大和物語』一四九段〕

といった例が散見する。しかし、これらの例と今問題にして

いる『はいずみ』の和歌中の「住み」とでは、明らかにレベ

ルが異なるだろう。

(12) 「涙」も、「住み」と同様(注7参照)に判断した。

(13) この問題については、「いたづら」(室城秀之氏「物語の視

界50選はいずみ」(『解釈と鑑賞』一九八一年二月)・小嶋

菜温子氏「はいずみ物語」(『体系物語文学史』第三卷、一九

八三年、有精堂)・「涙」(稻賀敏三氏「日本古典文学全集

『堤中納言物語』一九七二年、小学館）の対照が指摘されている。

(14) 作者が『はいずみ』という題名をつけたのか、後人が命名したのか、わからないが。

(15) 稻賀敬二氏は前掲書において、『はいずみ』では、その新しい女と縁が切れる結末をきわたせる代わりに、滑稽な笑いに紛らせて、一編を深刻な人間世界の物語とはせずに終わっている」と指摘しておられる。

(16) 竹村氏は、前掲論文において以下のように述べられた。

その意味で、墨塗りは男を思う思いの深さが招いた不幸な出来事とも見られよう。(中略) もちろん今妻を描く語りの戯画性は否定すべくもない。けれどもそれが戯画的であればあるほど、「化粧」する今妻の、女の哀しみは際立ってこよう。

〔付記〕本稿は、平成五年度広島大学国語国文学会春季研究集会において、「堤中納言物語『はいずみ』の方法」と題して口頭発表した内容に加筆したものです。席上貴重な御助言を賜りました諸先生には御礼申し上げます。また、論を成すにあたり、稲賀敬二・位藤邦生両先生には御多忙の折りにもかかわらず、終始あたたかい御指導を賜りました。深く感謝申し上げます。

げます。

なお、本稿受理の後、妹尾好信先生の『はいずみ』小考——典拠としての平中説話の考察を中心に——(『国語の研究』第十九号(一九九三年九月))が公にされました。したがって、本稿ではその論に触れえなかったことを付記しておきます。

——広島大学大学院博士課程後期在学——